EPIDEMIOLOGICAL STUDIES OF LEPROSY IN AICHI PREFECTURE

Akihiro SOBUE

(The Sanitary Department, Aichi Prefecture)

An epidemiological investigation was carried out on new cases of leprosy between 1906 and 1957 in Aichi Prefecture, mainly in the following leprosaria: Nagashima Aisei-en, Kuryu Rakusen-en, and the Suruga Leprosarium. The findings are as follows.

1. During the 50 years from 1906 to 1957, 1,546 new cases were found and the incidence rates were between 0.1 and 1.6 per 10,000 population. The average number of new cases in one year is therefore 29.7.

2. The prevalence rate was 24.7 per 10,000 population at the highest, and 5.3 at the lowest. The number of leprosy patients have come to decrease recently.

3. New cases were most frequently observed between the ages of 15 and 19, or 19.7% in rate, and 63.1% of the total cases had begun between the ages of 10 and 29.

4. The disease type L was observed in 59.6%, the type M in 17.0%, and the type N in 23.4%. The type ratio (L/M+N) was 1.47 and has been remarkably improved in the term of Showa (1926-57) in comparison with that in the terms of Meiji (1906-11) and Taisho (1911-1926).

5. The sex ratio was 259.5 during the above mentioned years, and 460.0 in the term of Taisho at the highest, but recently it decreased to 162.2.

6. 42.6% of the total cases had one or more other patients in their own families.

7. In 35.5% of the total cases the symptoms began in Spring; this rate is a little higher than that in other seasons.

8. 75.6% of the total patients or 1,170 in number, was admitted in leprosaria. In the term of Meiji or Taisho the rate of the patients admitted in leprosaria was lower, but gradually the length of their home residences were shortened. In recent years the patients are admitted in leprosaria immediately after the onset of the disease.

9. In younger patients the period of their home residences were relatively longer, but a comparatively high rate of them were admitted in leprosaria, while the older whose home residences were stabilized, were admitted in leprosaria in lower rate.

10. 7.1% of the total cases were diagnosed to be recovered generally, 45.7% were dead, 24.3% were returned to their own homes. The patients treated in their homes were 1.41 per 10,000 population at the highest, and 0.41% at the lowest which was recorded recently.

愛知県における癩の疫学的研究

祖 父 江 昭 仁

愛 知 県 衛 生 部 (部長 小川朝吉博士)
名古屋大学医学部予防医学教室 (指導 岡田 博教授)
(昭和 34 年 10 月 12 日受稿)

緒 言

らいがらい菌によつて起る伝染病であることは今日疑のないところであるが、初発疹が欠如し潜伏期が判然としないために、その感染状態を明確に証明しがたいので、らいの疫学については、殆んど明らかにされていない。

愛知県は従来より、全国屈指のらい県といわれ、明治以来、数次にわたる調査が行われてきたが、大正 8 年の全国的な在宅患者の調査¹⁾によれば、県下には 1,080 人の患者があつたといわれ、鹿児島、沖縄につぐ多らい県として述べられているが、近時は患者の著明な減少をみている。しかし、昭和 29 年の厚生省の資料²⁾によると、なお既知患者 87 人、収容患者 427 人となつており、年々 30 人前後の新届出患者をみている状態であつて、必ずしも楽観を許さざるものがある。

しかし、県下のらい患者の疫学的調査は、戦前に、浅野³⁾、田中⁴⁾、清水⁵⁾による名古屋大学外来らい患者の動向についての観察および光田⁶⁾による調査成績以外には、殆んど調査されておらず、特に戦後における患者の動向は全く明らかにされていないので、らいの疫学的特性を鮮明にし、今後のらい予防の資料とするために、愛知県におけるらい患者発生の疫学的観察を行つたので、これを報告する。

研究資料および研究方法

昭和 30 年春以来 2 カ年にわたり、愛知県出身のらい患者の最も多く入所しているらい療養所、即ち長島愛生園多磨全生園、栗生楽泉園および国立駿河療養所における死亡、退所を含む全入所患者、ならびに明治 39 年以降昭和 32 年末までにおける県下全在宅患者について療養所における検診票、患者台帳並びに県保有の患者台帳と現地調査とにより調査を行つた。

調査項目は氏名、性別、生年月日、病型、職業、国

籍、出生地、発病地、発病年月日、発病から入所までの年月、家族内患者の保有状況などである。

調査は、すべて前記療養所における専門医の診定結果の明らかなもののみについて行つたが、一部栗生楽泉園関係の分は火災のために詳細な記録が失われているので、これについては、当該事項の明らかでないものは不明として処理した。

また患者の出身地、発病地、現住地等については、古くから保管されている県の患者台帳と照合したものを使用した。在宅患者についても国立駿河療養所の専門医師による診定結果および名古屋大学医学部皮膚科の医師による診定結果の明らかなものを集計した。

即ち、明治末期より昭和 32 年に至る約 50 年間ににおける新発病患者を調査の対象としたが、在宅のまま経過した患者の中、明治時代ならびに大正初期のものは、その殆んどが資料不備であり、診断根拠も明確でないので、診定医師名の明確なもので、確実にらい疾患と把握し得たもののみとした。

なお、病型については現在新病型区分にvarietyあるが⁷⁾⁸⁾、診断当時の病型をそのまま使用するより方法がないので、これをそのまま使用し、L 型 (結節型)、M 型 (斑紋型)、N 型 (神経型) の 3 型に分類した。

人口については愛知県統計課発行の愛知県人口の資料⁹⁾により、罹患率は人口 10 万に対する率を算出し、小数第 2 位を 4 捨 5 入した。年令階級区分は 5 才階級別を採用した。

なお、有病率は明治 44 年以降 5 カ年目毎に算出した。

研 究 成 績

1) 患者発病状況 (第 1 表および第 1 図)

明治 39 年以来昭和 32 年に至る約 50 年間ににおける患者総数は 1,546 名で、1 カ年当り平均患者数は 29.7 名であつた。

年次別に、最も多くの患者の発病をみたのは昭和 17 年

第1表 発病年次別男女別らい患者発病状況

区 分 発病年次別	実 数			人 口 10 万 対 率			人口10万対3カ年平均罹患率			5カ年 罹患率	年 平 均 患 者 数
	計	男	女	計	男	女	計	男	女		
明治 39 (1906)	24	19	5	1.3	2.1	0.6	-	-	-	1.0	18.8
40 (1907)	11	5	6	0.6	0.5	0.7	0.8	1.1	0.5		
41 (1908)	8	6	2	0.4	0.6	0.2	0.6	0.7	0.4		
42 (1909)	15	11	4	0.8	1.1	0.4	1.0	1.3	0.5		
43 (1910)	36	26	10	1.8	2.3	1.0	0.9	1.4	0.5		
大正 44 (1911)	4	4	0	0.2	0.4	0	0.9	1.3	0.4	0.7	13.6
1 (1912)	13	11	2	0.6	1.1	0.2	0.5	0.8	0.3		
2 (1913)	16	9	7	0.8	0.9	0.7	0.7	1.1	0.4		
3 (1914)	16	13	3	0.8	1.2	0.3	0.8	1.1	0.5		
4 (1915)	19	14	5	0.9	1.3	0.5	0.9	1.5	0.3		
5 (1916)	23	21	2	1.1	2.0	0.2	0.9	1.4	0.4	1.1	22.4
6 (1917)	16	11	5	0.7	1.0	0.5	0.9	1.5	0.4		
7 (1918)	20	16	4	0.9	1.5	0.4	1.0	1.4	0.5		
8 (1919)	29	22	7	1.4	2.1	0.7	1.1	1.9	0.4		
9 (1920)	24	22	2	1.1	2.1	0.2	1.3	2.1	0.5		
10 (1921)	30	24	6	1.4	2.2	0.6	1.1	1.9	0.3	1.1	25.6
11 (1922)	17	14	3	0.8	1.3	0.3	1.2	2.0	0.5		
12 (1923)	32	26	6	1.5	2.4	0.5	1.2	1.9	0.4		
13 (1924)	27	21	6	1.2	1.9	0.5	1.2	1.9	0.5		
14 (1925)	22	16	6	0.9	1.4	0.5	1.2	2.0	0.5		
昭和 1 (1926)	36	30	6	1.5	2.6	0.5	1.2	2.0	0.5	1.2	29.8
2 (1927)	29	24	5	1.2	2.0	0.4	1.2	2.1	0.4		
3 (1928)	24	20	4	0.9	1.6	0.3	1.2	1.9	0.5		
4 (1929)	37	25	12	1.5	2.0	0.9	1.1	1.6	0.6		
5 (1930)	23	16	7	0.9	1.3	0.5	1.1	1.5	0.6		
6 (1931)	22	15	7	0.8	1.2	0.5	1.1	1.7	0.5	1.6	44.4
7 (1932)	43	36	7	1.6	2.7	0.5	1.4	2.2	0.6		
8 (1933)	45	36	9	1.7	2.7	0.7	1.8	2.8	0.9		
9 (1934)	61	41	20	2.2	3.0	1.4	1.9	2.7	1.1		
10 (1935)	51	33	18	1.8	2.3	1.2	1.8	2.4	1.1		
11 (1936)	38	29	9	1.3	2.0	0.6	1.5	2.0	0.8	1.6	49.2
12 (1937)	36	25	11	1.3	1.7	0.7	1.6	2.5	0.8		
13 (1938)	71	55	16	2.3	3.7	1.0	1.7	2.5	0.9		
14 (1939)	52	35	17	1.7	2.3	1.1	1.9	2.7	1.0		
15 (1940)	49	33	16	1.5	2.1	1.0	1.8	2.4	1.1		
16 (1941)	67	47	20	2.4	2.9	1.2	2.0	2.8	1.1	1.5	43.6
17 (1942)	76	57	19	2.3	3.4	1.1	1.8	2.3	1.0		
18 (1943)	36	26	10	1.0	1.5	0.6	1.3	1.9	0.7		
19 (1944)	20	11	9	0.6	0.7	0.5	0.8	1.0	0.5		
20 (1945)	19	13	6	0.7	0.9	0.4	0.6	0.8	0.4		
21 (1946)	16	10	6	0.7	0.7	0.4	0.7	1.0	0.4	0.8	28.4
22 (1947)	31	23	8	0.9	1.5	0.5	0.9	1.1	0.6		
23 (1948)	33	19	14	1.0	1.2	0.8	1.0	1.3	0.6		
24 (1949)	29	18	11	0.9	1.1	0.6	1.0	1.2	0.7		
25 (1950)	33	19	14	0.9	1.2	0.8	0.8	1.0	0.6		
26 (1951)	20	14	6	0.6	0.8	0.3	0.7	0.9	0.4	0.5	19.4
27 (1952)	17	13	4	0.5	0.8	0.2	0.5	0.7	0.3		
28 (1953)	17	10	7	0.5	0.6	0.4	0.5	0.7	0.3		
29 (1954)	18	10	8	0.5	0.6	0.4	0.5	0.6	0.5		
30 (1955)	25	13	12	0.7	0.7	0.6	0.5	0.6	0.4		
31 (1956)	13	9	4	0.3	0.5	0.2	0.4	0.5	0.3	0.2	10.5
32 (1957)	8	5	3	0.2	0.3	0.2	.	.	.		
小 計	1,497	1,081	416	1.1	1.6	0.6	.	.	.	.	.
年 次 不 明	49	35	14	.	.	.	.	.	.	.	.
計	1,546	1,116	430	.	.	.	.	.	.	.	29.7

で76名を示し年次不明患者49名を除く全患者の5.1%で、次いで昭和13年 71名、4.7%、昭和16年 67名、4.5%といずれも昭和中期の戦争前後の頃に著明で、最も患者発病の少なかったのは明治41年ならびに昭和32年のそれぞれ8名、0.5%であつた。これを人口10万対率にてみると、やはり昭和中期に著明で、昭和16年は人口10万対2.4を示し、次いで昭和13、17年の2.3、昭和9年2.2となり、最も低いのは明治44年ならびに昭和32

年の0.1であつた。

時代別に患者発病の経過をみると、明治末期(明治39～43年)5カ年間には、年平均患者数18.8名で、人口10万対1.0であるが、大正中期(大正5～9年)より増加の傾向をみせ、年平均患者数も20名を越すと共に罹患率も1.1と上昇をみせた。更にこの傾向は昭和に入ると急激に増加をみせ、昭和6年以降は5カ年平均罹患率も1.6と増加し、患者数においても1カ年平均50名弱を示

第1図 年次別3カ年平均罹患率(人口10万対)

したが、この傾向は昭和中期(昭和11～20年)も同様で戦争中(昭和16～20年)は年平均患者数43.6名、人口10万対1.5で経過し戦後の過程に入っている。戦後の5カ年間は平均患者数28.4名と戦争ならびに戦後の混乱時代にもかかわらず患者の発病は減少の傾向をみせ、人口10万対率においても0.8と減少をみせている。最近では更に著明な減少をみせ平均患者数をみても19.4名と20名を割り、人口10万対率においても0.5を示してをり、最近の2カ年間は10.5名、0.2と、昭和初期中期の最も罹患率の高い頃に比し、罹患率においては $\frac{1}{8}$ 、平均患者数においても $\frac{1}{4}$ ～ $\frac{1}{5}$ の減少を示すに至っている。

このことは、3カ年平均罹患率についてみると、更に明瞭で、明治末期以来、若干の変動はあるが、次第に罹患率の上昇をみ、人口10万対1.2前後で経過するが、昭和7年以降急激な増加をみせ、昭和10年には1.9とピークを形成し、以後2～3年間には若干の減少をみせたが昭和12年以降再び増加をみせ、昭和16年には2.0と最も高い罹患率を示した。しかし、その後は、戦時中にもかかわらず、急激に減少に転じ、昭和20年には0.6を示した。戦後、昭和21年以降は、敗戦による国民生活の混乱のためか、再び0.9～1.0と増加の傾向をみせているが、昭和25年以降は国民生活の安定とともに急速に進展をみせた諸般の公衆衛生事業の飛躍的な進展ならびに行政庁による患者の隔離措置の強化とともに最近では、0.5より0.4を示すに至っている。

更に3カ年平均罹患率の変遷を男女別にみると、男女間に著しい相異が認められる。即ち、男性では、既に大正5年頃より急激な増加傾向をみせてをり、大正8年以降は、おおむね2.0前後で経過したが、昭和5年には1.5と減少をみせたものの、その後は2.0～2.3の高率の

まま昭和21年以降の過程に入っている。

女性では、明治末期以来昭和5年頃までは、男性の増加にもかかわらず、ほぼ0.5前後で経過し、昭和8年以降やや増加して1.1を示したが、昭和19年には0.5と減少し、戦後の過程に移行している。

戦後は、男女とも、ほぼ同じ傾向で経過し昭和31年には男0.5、女0.3を示した。

2) 有病率(第2表)

第2表 主要年次患者数(有病率)(人口10万対)

年 区 分	患 者 数	有 病 率
明 治 43 (1910)	94	5.25
大 正 4 (1915)	159	8.18
大 正 9 (1920)	261	12.49
昭 和 1 (1925)	375	16.17
昭 和 5 (1930)	498	19.43
昭 和 10 (1935)	656	22.92
昭 和 15 (1940)	781	24.67
昭 和 20 (1945)	771	24.69
昭 和 25 (1950)	714	21.06
昭 和 30 (1955)	678	17.71
昭 和 32 (1957)	672	17.56

明治39年以降5カ年目毎に患者数をみてみると、明治43年には94名の患者を有し、人口10万対5.25であつたが、その後は時代の経過とともに増加の傾向を示し、昭和15年には781名の最も多くの患者数を印したが、人口10万対においても24.67と増加をみせた。戦中はそのまま経過したが、この傾向は昭和25年にいたり714名、21.06と新患者発生の減少もあつて、やや減少の傾向をみせたが、近年にいたり更に減少し、昭和30年には678名、17.71となつた。

3) 患者数の変遷ならびに転帰(第3表)

明治39年以降昭和32年末までにおける患者総数1,546名中、発病時期不明の患者49名を除く1,497名の患者の発病時期別患者数の変遷ならびに転帰についてみると明治43年末における総患者数94名の中、4名は入所し、90名は在宅患者であつたが、大正4年末には、更に68名の新患者を加え、患者総数は162名となつたが、入所患者もまた12名をみた。しかし、入所後死亡した患者3名と退所し再び在宅患者となつた患者1名をみているので、入所患者総数は8名、在宅患者は151名で、入所患者のほぼ19倍の在宅患者をみている。大正9年末には29名の入所患者の中、死亡11名と退所患者2名をみたため、入所中のものは16名で、在宅患者245名を数え、

第3表 患者数の変遷

年 区 分	患者発病数	患者延数	入 所			在 宅				在 宅 入 所 患者数 患者数		
			入 所	死 亡	退 所	入 所	死 亡	取 消	退所住宅			
明治 39 明治 43	計	94	94	4	-	-	-	-	-	90	4	
	男女	67 27	67 27	4 -	- -	- -	- -	- -	- -	63 27	4 -	
明治 44 大正 4	計	68	162	4	3	1	8	-	-	151	8	
	男女	51 17	118 44	4 -	2 1	1 -	6 2	- -	- -	109 42	7 1	
大正 5 大正 9	計	112	274	9	11	2	20	1	1	245	16	
	男女	92 20	210 64	9 -	9 2	2 -	16 4	1 -	1 -	185 60	14 2	
大正 10 大正 14	計	128	402	14	21	6	52	5	1	336	39	
	男女	101 27	311 91	14 -	17 4	5 1	43 9	5 -	1 -	253 83	35 4	
昭和 1 昭和 5	計	149	551	28	41	13	127	10	1	397	101	
	男女	115 34	426 125	25 3	35 6	11 2	104 23	9 1	1 -	298 99	83 18	
昭和 6 昭和 10	計	222	773	76	99	23	270	16	1	432	224	
	男女	161 61	587 186	56 20	86 13	20 3	223 47	14 2	1 -	313 119	172 52	
昭和 11 昭和 15	計	246	1,019	140	186	57	420	42	6	464	317	
	男女	177 69	764 255	107 33	148 38	47 10	324 96	34 8	6 -	340 124	233 84	
昭和 16 昭和 20	計	218	1,237	189	369	93	581	78	8	463	308	
	男女	154 64	918 319	142 47	293 76	68 25	443 138	60 18	7 1	334 129	215 93	
昭和 21 昭和 25	計	142	1,379	259	477	117	727	136	39	104	322	392
	男女	89 53	1,007 372	189 70	362 115	85 32	542 185	107 29	31 8	85 19	223 99	269 123
昭和 26 昭和 30	計	97	1,476	325	514	137	818	169	98	120	186	492
	男女	60 37	1,067 409	226 99	381 133	98 39	596 222	131 38	71 27	97 23	140 46	328 164
昭和 31 昭和 32	計	21	1,497	343	518	138	829	181	109	121	156	516
	男女	14 7	1,081 416	238 105	383 135	99 39	604 225	139 42	79 30	98 23	119 37	345 171

入所患者のほぼ16倍の在宅患者をみた。その後も引続き新患者の増加とともに、入所患者、在宅患者も急激に増加し、昭和10年末では入所中患者224名、在宅患者432名となつてゐるが、昭和時代に入つて著明なのは在宅患者の入所するものの増加が著明になつたことで昭和10年末までにおける在宅患者で入所したものは270名を数えている。しかし反面入所患者の死亡も99名、在宅患者の死亡16名を数え、退所患者も23名を数えているが、その中、22名は再び在宅患者となつてゐる。

昭和15年末は、更に新患者246名を数え、患者総数1,019名となつたが、入所患者も560名となり、死亡患者186名、退所患者57名を数えるので、入所中の患者は317名、在宅患者は退所在宅者53名を加えて464名となつてゐる。

昭和20年末における入所中患者は308名、在宅患者は463名である。

戦後、昭和21～25年には新患者142名を加え、患者総数1,379名を数えるが、入所率の向上とともに216名の多数の患者の入所をみ、入所中の死亡等を除き、入所患者数は392名、在宅患者数は322名と、はじめて入所患者と在宅患者の比が逆転をみせてゐる。昭和30年末における在宅患者は186名、入所患者492名である。

昭和32年末におけるほぼ50年間の総患者の状況は、入所中死亡総数518名、在宅のまま死亡したもの181名で入所せるも何らかの理由により退所した患者は138名でその中121名は退所後在宅しているものであつた。また特に戦後は症状固定により軽快治癒者として、らい患者台帳より抹消せられたものの増加をみとめ、32年末には

総数 109 名にのぼっている。従つて昭和32年末における入所患者は 516 名 (男 345 名, 女 171 名) で, 在宅患者は退所在宅者を含め 156 名 (男 119 名, 女 37 名) に及んでいる。

4) 発病年齢

a) 全患者発病年齢 (第4表および第2図)

第4表 男女別5才階級年齢別発病年齢

年齢区分	総 数	男	女	性 比
	実 数(%)	実 数(%)	実 数(%)	
0 ~ 4	1 (0.06)	1 (0.09)	-	-
5 ~ 9	73 (5.0)	44 (4.1)	29 (7.1)	151.7
10 ~ 14	195 (13.4)	141 (13.4)	54 (13.3)	261.1
15 ~ 19	257 (17.1)	193 (18.4)	64 (15.8)	301.6
20 ~ 24	234 (16.0)	176 (16.7)	58 (14.2)	303.4
25 ~ 29	179 (12.3)	149 (14.1)	30 (7.4)	496.7
30 ~ 34	115 (7.9)	88 (8.3)	27 (6.7)	325.9
35 ~ 39	97 (6.7)	68 (6.4)	29 (7.1)	234.5
40 ~ 44	66 (4.5)	43 (4.0)	23 (5.7)	187.0
45 ~ 49	70 (4.8)	37 (3.5)	33 (8.1)	112.1
50 ~ 54	57 (3.9)	36 (3.4)	21 (5.2)	171.4
55 ~ 59	42 (2.9)	30 (2.8)	12 (3.0)	250.0
60 ~ 64	35 (2.4)	22 (2.0)	13 (3.2)	169.2
65 ~ 69	15 (1.0)	12 (1.1)	3 (0.7)	400.0
70 ~ 74	11 (0.8)	7 (0.6)	4 (1.0)	175.0
75 ~ 79	6 (0.4)	2 (0.1)	4 (1.0)	50.0
80 ~	4 (0.3)	2 (0.1)	2 (0.5)	100.0
小 計	1,457(100.0)	1,051(100.0)	406(100.0)	258.9
年齢不詳	89	65	24	270.8
計	1,546	1,116	430	259.5
<39/40<	3.7	4.5	2.5	.
<19/60<	7.4	8.4	5.6	.
平均年齢	27.9	27.2	29.6	.

第2図 発病年齢分布曲線

患者総数1,546名中, 発病年齢推定可能な患者は1,457名で, この発病年齢分布を5才階級別にみると15~19才に最も高く17.1%を示し, 次いで20~24才の16.0%,

10~14才の13.4%, 25~29才の12.3%で, 10~29才の年齢層における発病は全体の58.8%を占めている。

60才以上の高令者の発病は総数71名で4.9%にみられた。

らいの老化を知るに重要といわれている, 39才と40才前後比¹⁰⁾ (<39/40<と記載す) および, 19才前と60才以後の比¹⁰⁾ (<19/60<と記載す) についてみると, 前者は3.7, 後者は7.4で, 全患者の平均発病年齢は27.9才である。

b) 男女別発病年齢

男女別に発病年齢をみると, 男女とも15~19才に最も高率を示し, 全患者の発病年齢分布とほぼ同様の結果を示している。即ち男では15~19才の発病は18.4%で, 続いて20~24才の16.7%, 10~14才13.4%, 25~29才14.1%となり, 10~29才の年齢層における発病は62.6%を占め, 60才以上の発病は3.9%である。

女性では15~19才の発病は15.8%, 次いで20~24才14.2%, 10~14才13.3%で, 10~29才の発病は50.7%で, 男性に比しかなりの低率を示している。60才以上の発病は6.4%で, 男に比し高令者発病の割合が高い。このことは, 女では男に比し, 比較的30才以上の中年層における発病が著明であることを意味し, 平均発病年齢をみても男の27.2年にに対し, 女では29.6年と2.4年の差がみられ, 更に<39/40<では男4.5, 女2.5, <19/60<では男8.4, 女5.6といずれをみても, この傾向がうかがわれる。

男女別に発病年齢分布曲線をみると, 9才以前では男の比率に比し女の分布がやや多く, 思春期以降は男のそれに比し, 女の年齢分布はやや低率であるが, 36才以降は再び女の比率の増加をみている。

発病年齢別に性比をみると, 5~9才の151.7より, 年齢の長ずるに従つて性比は増大し, 25~29才には496.7と最大に達し, 思春期以降, 中年層までにおける男性発病の著明なことを示してをり, 30才以降は再び年齢の増加とともに, おおむね減少する傾向を示しているが, 50才以降は65~69才の400.0を除き, 169.2~250.0の間を示している。

c) 発病時期別発病年齢 (第5表および第3図)

発病時期別に平均発病年齢についてみると, 明治時代には平均22.1年で, 以下時代の経過とともに大正初期では平均24.6年と漸次増大する傾向をみせたが, 大正末期には21.2年と再び平均年齢の若年化がうかがわれた。しかし, その後は年々増加の傾向を示し, 昭和11~15年には28.3年と増加し, その後も戦争ならびに戦後

第5表 発病時期別発病年令（人口10万対）

発病年令	明治39~43 (1906~1910)	明治44~大正4 (1911~1915)	大正5~9 (1916~1920)	大正10~14 (1921~1925)	昭和1~5 (1926~1930)	昭和6~10 (1931~1935)	昭和11~15 (1936~1940)	昭和16~20 (1941~1945)	昭和21~25 (1946~1950)	昭和26~30 (1951~1955)	昭和31~32 (1956~1957)	小計	年次不詳	計
0~4	-	-	-	-	1(0.06)	-	-	-	-	-	-	1	-	1
5~9	11(1.0)	5(0.4)	13(1.0)	5(0.4)	7(0.5)	6(0.4)	8(0.5)	9(0.5)	4(0.4)	5(0.2)	-	73	-	73
10~14	13(1.4)	9(0.9)	11(0.9)	35(2.54)	26(1.9)	30(1.9)	27(1.5)	20(1.2)	17(1.0)	5(0.2)	1(0.05)	194	1	195
15~19	16(2.0)	12(1.3)	23(2.2)	25(2.08)	35(2.39)	52(3.41)	43(2.4)	30(2.6)	14(0.8)	5(0.2)	1(0.04)	256	1	257
20~24	12(1.5)	11(1.4)	19(2.2)	25(2.48)	28(2.43)	45(3.35)	44(3.1)	23(1.7)	21(1.3)	4(0.2)	2(0.1)	234	-	234
25~29	15(2.0)	12(1.6)	16(2.2)	14(1.7)	17(1.7)	29(2.6)	32(2.4)	22(2.1)	13(1.1)	8(0.5)	1(0.06)	179	-	179
30~34	5(0.7)	6(0.8)	13(1.9)	7(1.0)	6(0.7)	14(1.4)	18(1.6)	18(1.7)	15(1.4)	13(1.1)	-	115	-	115
35~39	3(0.6)	4(0.6)	6(0.9)	6(0.9)	8(1.1)	13(1.6)	18(1.9)	21(2.1)	8(0.8)	10(0.9)	-	97	-	97
40~44	3(0.6)	2(0.4)	6(1.0)	4(0.6)	2(0.3)	8(1.2)	13(1.7)	9(1.1)	8(0.9)	9(0.8)	2(0.2)	66	-	66
45~49	2(0.5)	4(0.9)	1(0.2)	2(0.3)	7(1.1)	8(1.3)	10(1.5)	16(2.1)	10(1.2)	8(0.9)	2(0.2)	70	-	70
50~54	1(0.2)	1(0.3)	2(0.5)	3(0.7)	4(0.7)	7(1.2)	9(1.5)	11(2.2)	11(1.7)	6(0.7)	2(0.2)	57	-	57
55~59	2(0.5)	-	1(0.3)	-	-	4(0.9)	5(0.9)	11(2.1)	7(1.1)	9(1.4)	3(0.5)	42	-	42
60~64	-	-	1(0.3)	-	3(1.0)	2(0.6)	8(1.8)	7(1.5)	9(1.95)	3(0.6)	2(0.4)	35	-	35
65~69	-	-	-	-	-	-	3(1.3)	2(0.5)	1(0.3)	5(1.3)	4(1.4)	15	-	15
70~74	-	1(0.6)	-	-	1(0.5)	-	1(0.5)	4(1.6)	3(1.2)	1(0.3)	-	11	-	11
75~79	-	-	-	-	-	-	1(0.9)	4(3.3)	-	1(0.2)	-	6	-	6
80以上	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3(0.3)	1(0.1)	4	-	4
小計	83	67	112	126	145	218	240	207	141	95	21	1,455	2	1,457
年令不詳	11	1	-	2	4	4	6	11	1	2	-	42	47	89
計	94	68	112	128	149	222	246	218	142	97	21	1,497	49	1,546
<39/40<	9.4	7.4	9.2	13.0	7.5	6.5	3.8	2.2	1.9	1.1	0.3	-	-	-
<19/60<	∞	26.0	47.0	∞	17.3	44.0	6.0	3.5	2.7	1.2	0.3	-	-	-
平均年令	22.06	24.61	23.43	21.21	23.45	24.84	28.33	32.65	33.17	39.63	48.90	-	15	-

第3図 発病時期別発病年令

の混乱時代にもかかわらず著明な影響をみせず32.7年と老化を示し、戦後は更に著明な老化傾向を示している。

<39/40<, <19/60<, についてみても、前者では明治時代の9.4より、大正時代に入ると7.4~13.0と若年層発病の増加傾向をみせているが、昭和時代に入ると初期には7.5を示したが、その後は次第に減少し、昭和11年以降には3.8と新発病患者の増加にもかかわらず老化

傾向を示し、戦中、戦後もひきつづき減少し、最近では1.1と若年、老年層発病に差が殆んどみられない。後者についてみても全く同様で、昭和11年以降は6.0~3.5と老年層発病の急激な増加をみると、戦後には更にこの傾向が著明で、最近では0.3とむしろ老年層の発病が上廻る様相を示している。

因みに発病時期別に5才階級別に患者の百分比をみると、明治末期には10~29才における発病は67.6%で60才以上の発病者は認めず、おおむねこの傾向は昭和10年に至るまで続くが、その後は10~29才の年令層の占める割合は次第に減少を示し、昭和26~30年には23.2%を示すにすぎない。即ち、明治、大正時代には、らい患者の発病年令はその $\frac{2}{3}$ ~ $\frac{4}{5}$ が30才前の若年層であつたが、昭和時代に入ると、その比率が次第に減少するとともに60才以上の老年層の発病がみられるに至り、その後は次第に増加して、昭和26~30年には13.9%と老年層の占める割合が著しく増加している。

即ち、昭和11年以降は発病年令の面では著明な老化現象を示し、戦中戦後の混乱期にもこの老化現象はそのまま漸進し、戦後には更にきわだつた老化を示している。

発病年次別に発病年令分布を比較してみると、明治、大正時代にはそれぞれ10~29才に峰をもつた典型的な発

第6表 発病時期別男女別発病年令 (人口10万対)

年令区分	明治 39 ~ 43 (1906~1910)		明治 44~大正 4 (1911~1915)		大正 5 ~ 9 (1916~1920)		大正 10 ~ 14 (1921~1925)		昭和 1 ~ 5 (1926~1930)		昭和 6 ~ 10 (1931~1935)			
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女		
	実数 10万対	実数 10万対	実数 10万対	実数 10万対	実数 10万対	実数 10万対	実数 10万対	実数 10万対	実数 10万対	実数 10万対	実数 10万対	実数 10万対		
0 ~ 4	-	-	-	-	-	-	-	-	1 0.11	-	-	-		
5 ~ 9	5 0.94	6 1.16	3 0.53	2 0.36	9 1.37	4 0.62	5 0.77	-	5 0.68	2 0.28	2 0.24	4 0.49		
10~14	8 1.73	5 1.12	6 1.15	3 0.59	10 1.74	1 0.17	27 4.06	8 1.13	19 2.89	7 1.02	21 2.77	9 1.11		
15~19	14 3.39	2 0.51	10 2.19	2 0.46	19 3.83	4 0.74	22 3.71	3 0.46	29 4.17	6 0.78	39 5.43	13 1.61		
20~24	10 2.50	2 0.52	9 2.26	2 0.53	17 4.01	2 0.47	20 3.98	5 0.99	20 3.50	8 1.38	32 4.99	13 1.85		
25~29	11 2.90	4 1.06	8 2.08	4 1.07	16 4.30	-	13 3.00	1 0.24	16 3.15	1 0.21	22 3.83	7 1.28		
30~34	4 1.18	1 0.30	6 1.66	-	11 3.24	2 0.60	5 1.34	2 0.57	3 0.69	3 0.75	10 2.00	4 0.86		
35~39	1 0.39	2 0.81	3 0.91	1 0.31	5 1.50	1 0.30	3 0.87	3 0.92	6 1.62	2 0.59	12 2.81	1 0.26		
40~44	3 1.24	-	2 0.81	-	3 0.99	3 1.00	3 0.91	1 0.31	1 0.30	1 0.32	5 1.40	3 0.91		
45~49	1 0.49	1 0.51	3 1.30	1 0.46	-	1 0.44	-	2 0.69	5 1.58	2 0.64	5 1.55	3 0.99		
50~54	1 0.47	-	-	1 0.48	1 0.51	1 0.52	3 1.37	-	3 1.09	1 0.36	4 1.36	3 1.01		
55~59	1 0.54	1 1.22	-	-	1 0.63	-	-	-	-	-	4 1.61	-		
60~64	-	-	-	-	-	1 0.61	-	-	3 2.01	-	2 1.18	-		
65~69	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
70~74	-	-	1 1.31	-	-	-	-	-	-	1 0.93	-	-		
75~79	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
80~	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
不 詳	8	3	-	1	-	-	-	2	4	-	3	1		
計	67 1.49	27 0.61	51 1.04	17 0.35	92 1.78	20 0.38	101 1.76	27 0.46	115 1.81	34 0.53	161 2.27	61 0.84		
<19/60<	-	-	50.0	-	-	9.0	-	-	18.0	15.0	31.0	-		
<39/40<	8.8	11.0	7.5	7.0	17.4	2.3	15.8	7.3	8.3	5.8	6.9	5.7		
平均年令	22.62	20.75	25.03	23.25	22.65	27.00	20.51	23.80	23.13	24.50	25.29	23.67		
人口性比	101.10		101.44		97.91		98.39		98.74		98.18			
年令区分	昭和 11 ~ 15 (1936~1940)		昭和 16 ~ 20 (1941~1945)		昭和 21 ~ 25 (1946~1950)		昭和 26 ~ 30 (1951~1955)		昭和 31 ~ 32 (1956~1957)		不 詳		計	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
	実数 10万対	実数 10万対	実数 10万対	実数 10万対	実数 10万対	実数 10万対	実数 10万対	実数 10万対	実数 10万対	実数 10万対	実数 10万対	実数 10万対	実数 10万対	実数 10万対
0 ~ 4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1 0.89	-
5 ~ 9	3 0.33	5 0.55	7 0.76	2 0.22	2 2.00	2 0.21	3 2.59	2 1.83	-	-	-	-	44 3.94	29 6.74
10~14	19 0.22	8 0.91	16 1.83	4 0.46	10 1.14	7 0.82	3 2.93	2 2.00	1 0.97	-	1 -	-	141 12.63	54 12.56
15~19	30 3.48	13 1.45	19 2.33	11 1.33	5 0.57	9 0.96	4 3.98	1 0.87	1 1.00	-	1 -	-	193 17.29	64 14.88
20~24	34 5.02	10 1.38	16 2.47	7 0.95	13 1.71	8 0.98	3 0.32	1 0.10	2 0.21	-	-	-	176 15.77	58 13.49
25~29	26 3.80	6 0.91	17 3.74	5 0.81	12 2.19	1 0.15	7 0.85	1 0.13	1 0.12	-	-	-	149 13.35	30 6.98
30~34	17 2.97	1 0.19	13 2.64	5 0.86	13 2.75	2 0.34	6 1.11	7 1.03	-	-	-	-	88 7.89	27 6.28
35~39	11 2.25	7 1.54	15 3.14	6 1.14	6 1.21	2 0.35	6 1.25	4 0.65	-	-	-	-	68 6.09	29 6.74
40~44	10 2.43	3 0.80	9 2.11	-	4 0.88	4 0.86	3 0.59	6 1.04	-	2 0.35	-	-	43 3.85	23 5.35
45~49	4 1.18	6 1.90	10 2.55	6 1.61	5 1.22	5 1.25	3 0.65	5 1.08	1 0.22	1 0.22	-	-	37 3.32	33 7.67
40~54	6 2.00	3 1.04	9 5.79	2 0.82	5 1.47	6 1.85	2 0.49	4 0.98	2 0.49	-	-	-	36 3.23	21 4.88
55~59	4 1.50	1 0.36	5 1.59	6 2.28	5 1.81	2 0.72	9 2.74	-	1 0.30	2 0.66	-	-	30 2.69	12 2.79
60~64	5 2.35	3 1.27	3 1.36	4 1.71	6 2.67	3 1.27	2 0.81	1 0.42	1 0.41	1 0.42	-	-	22 1.97	13 3.02
65~69	3 2.22	-	-	2 1.00	1 0.58	-	4 2.40	1 0.46	4 2.40	-	-	-	12 1.08	3 0.70
70~74	-	1 0.92	4 3.64	-	1 0.91	2 1.35	1 0.80	-	-	-	-	-	7 0.63	4 0.93
75~79	-	1 0.15	2 4.07	2 0.27	-	-	-	1 0.96	-	-	-	-	2 0.18	4 0.93
80~	-	-	-	-	-	-	2 0.58	1 0.17	-	1 0.17	-	-	2 0.18	2 0.47
不 詳	5	1	9	2	1	-	-	-	-	-	33	14	65 5.82	24 5.58
計	177 2.24	69 0.87	154 2.03	64 0.80	89 1.08	53 0.61	60 1.26	37 0.38	14 0.38	7 0.18	35	14	1116 100.00	430 100.00
<19/60<	6.5	5.2	4.7	2.1	2.1	3.6	1.1	1.3	0.4	0	-	-	8.4	5.7
<39/40<	4.4	2.8	2.5	1.8	2.3	1.4	1.2	0.9	0.6	0	-	-	4.5	2.5
平均年令	28.02	29.13	31.55	33.61	33.25	33.04	39.76	39.43	45.57	55.57	-	-	27.24	29.61
人口性比	99.89		94.88		94.70		94.86		94.86					

病年令分布曲線を示すのに対し、昭和時代に入ると、比較的高令者の発病が著明となるにつれて、青少年峰が低下し、壮年老年層の増加が認められ、昭和21年以降は、特に青少年峰の改善が著明で、最近では、若年層に殆んどみえるべきピークが認められず、右方に上昇したなだらかな傾斜線を示すにいたっている。

更に5才階級年令別に年次推移をみると、減少の最も著明なのは15～19才で、人口10万対につき、明治時代2.0より時代の経過とともに増加をみせ、戦中には3.5と最大値を示したが、戦後は急激な減少傾向に転じ、最近では0.04と明治時代の $\frac{1}{50}$ に、戦時最高時のほぼ $\frac{1}{90}$ と非常な減少をみせている。

次いで20～24才、25～29才、10～14才に同様な減少傾向がみられる。

60才以上の老年層に発病をみたのは大正5～9年に1名をみている他は、すべて昭和時代に入ってからで、昭和1～5年には4名の発病がみられるが、その後は特に昭和11年以降著明となり、人口10万対率でみると65～69才では最近においても1.4と減少を示さず、他の年令の減少も若年層ほど著明ではない。

明治時代の発病年令順位は15～19才、25～29才、20～24才、10～14才、5～9才の順で、戦前はおおむねこの傾向で経過するが戦後には若年層の減少とともに老年層の進出が著明で、最近では65～69才、55～59才、90～64才、40～44才、45～49才、50～54才といずれも高令層が上位を占め、最下位は15～19才の人口10万対0.04となつている。

d) 発病時期別男女別発病年令 (第6表)

発病時期別に男女別に発病年令をみると、人口10万対では、明治時代には男の平均発病年令は22.6才で、女の20.8才に比しやや男の発病年令高く、罹患率の最も高いのは男では15～19才3.39、女では55～59才1.22となつている。

大正初期には平均発病年令は男女とも若干の老化をみせているが、大正5～9年では男の平均発病年令は22.7才と若年化を示しているのに、女では27.0才と更に老化を示している。大正末期には男女とも若年化を示し、男20.5才、女23.8才と疫学的に不良の様相をみせ、最高罹患率も男10～14才4.06、女10～14才1.13となつている。

昭和初期には男女とも平均発病年令は再び男23.1才、女24.5才と老化を示しているが、男女とも、年令分布の傾向は明治大正時代と著しい相異を示していない。

その後も全く同様で時代の経過とともに、発病年令の

老化を示しているが、60才以上の高令者発病を、男女ともにみるのは明治大正時代と著しくおもむきを異にするところである。

戦後、昭和21～25年の5年間は、平均発病年令では、戦中の5カ年間で男女とも殆んど変つていないが、各年令とも罹患率の減少が著明である。最近の昭和26～30年では、男の平均発病年令39.8才、女のそれは39.4才と男女とも著しく老化をみせている。

即ち、明治・大正時代では平均発病年令をみると、男女とも動揺をみせつつ経過し、しかも60才以上の高令者の発病を殆んどみていないが、昭和時代に入ると、とくに戦中戦後には、平均発病年令の老化が著明となるとともに高年者の発病を相当数にみるに至つており、このことは各年令比をみても同様にいうことであるが、男女別には年令による特異性は見出し得ない。

e) 病型別発病年令 (第7表)

第7表 5才階級発病年令別病型別患者数

年令区分	L 実数(%)	M 実数(%)	N 実数(%)	計 実数(%)	不詳	病型比 ($\frac{L}{M+N}$)
0～4	-	1 (0.4)	-	1 (0.07)	0	-
5～9	39 (4.6)	14 (6.0)	20 (6.3)	73 (5.2)	0	1.1
10～14	139 (16.3)	17 (7.3)	35 (10.9)	191 (13.6)	4	2.6
15～19	184 (21.7)	17 (7.3)	53 (16.4)	254 (18.0)	3	2.6
20～24	158 (18.5)	35 (14.9)	34 (10.6)	227 (16.1)	7	2.2
25～29	112 (13.1)	29 (12.4)	31 (9.7)	172 (12.2)	7	1.8
30～34	57 (6.7)	27 (11.5)	25 (7.8)	109 (7.8)	6	1.1
35～39	49 (5.7)	22 (9.4)	23 (7.2)	94 (6.7)	3	1.1
40～44	26 (3.0)	12 (5.1)	23 (7.2)	61 (4.3)	5	0.7
45～49	27 (3.2)	14 (6.0)	23 (7.2)	64 (4.6)	6	0.7
50～54	25 (2.9)	9 (3.8)	17 (5.3)	51 (3.6)	6	0.9
55～59	13 (1.5)	13 (5.6)	13 (4.1)	39 (2.8)	3	0.5
60～64	10 (1.2)	13 (5.6)	12 (3.8)	35 (2.5)	0	0.4
65～69	3 (0.4)	7 (3.0)	5 (1.6)	15 (1.1)	0	0.2
70～74	5 (0.6)	1 (0.4)	4 (1.3)	10 (0.7)	1	1.0
75～79	3 (0.4)	2 (0.9)	1 (0.3)	6 (0.4)	0	1.0
80～	2 (0.2)	1 (0.4)	1 (0.3)	4 (0.3)	0	1.0
小計	852(100.0)	234(100.0)	320(100.0)	1,406(100.0)	51	1.5
年令不詳	23	16	22	61	28	0.6
計	875	250	342	1,467	79	1.4
<39/40<	5.3	2.2	2.2	3.2	-	-
<19/60<	7.8	2.0	4.6	7.4	-	-
平均年令	24.8	33.2	30.9	27.6	-	-

病型の確認されている患者1,467名について、病型別に発病年令をみると、L型では15～19才にピークが認められ21.7%で、次いで20～24才、10～14才の順位となり、10～29才における年令層発病は71.3%を占めているが、M型では20～24才にピークがみられ、14.9%で10～29才の年令層の占める割合は41.9%で、残りの大半は高

令者が占めている。N型でも、やはり15～19才にピークがみられ16.4%で、次いで10～14才となっており、10～29才の発病は47.6%であった。

<39/40<, <19/60< についてみると、L型では前者5.3, 後者7.8と著しく若年者発病の多きを示しており、M型では前者2.2, 後者2.0と若年患者とともに、また高年者にも多くの発病のあることを物語っている。N型では前者2.2, 後者4.6とM型ほどではないが、老年層発病も相当あることがうかがわれる。

平均発病年令ではL型に最も小さく、M型が33.2年と最も大きい。N型では30.9年とL・M両型のほぼ中間値を示している。

発病年令別に病型比¹⁾をみると10～19才では2.6を示し、最も病型比大で、次いで20～24才の2.2, 25～29才の1.8となり、若年層にL型の占める割合の多いことがわかり、年令の増加と共に病型比はおおむね減少し、40才以上では、逆にM+N>Lの様相を示している。即ち年令の増加とともにM型、N型の増加、L型の減少となつてあらわれる。

f) 発病年令よりみた在宅患者と収容患者(第8表, 第4図)

在宅のまま経過した患者と療養所へ収容した患者別に

第8表 発病年令別在宅入所別患者数

区分 年令階級	計		在宅		入所		入所率
	実数	百分比	実数	百分比	実数	百分比	
0～4	1	0.07	0		1	0.1	100.0
5～9	73	5.0	7	2.1	66	5.9	90.4
10～14	195	13.4	13	3.8	182	16.3	93.3
15～19	257	17.6	17	5.0	240	21.4	93.4
20～24	234	16.1	41	12.1	193	17.2	82.5
25～29	179	12.3	46	13.6	133	11.9	74.3
30～34	115	7.9	39	11.5	76	6.8	64.3
35～39	97	6.7	36	10.7	61	5.5	62.9
40～44	66	4.5	29	8.6	37	3.3	56.0
45～49	70	4.8	31	9.2	39	3.5	55.7
50～54	57	3.9	22	6.5	35	3.1	61.4
55～59	42	2.9	20	5.9	22	2.0	52.4
60～64	35	2.4	18	5.3	17	1.5	48.5
65～69	15	1.0	7	2.1	8	0.7	53.3
70～74	11	0.8	6	1.8	5	0.4	45.5
75～79	6	0.4	3	0.9	3	0.3	50.0
80～	4	0.3	3	0.9	1	0.1	25.0
小計	1,457	100.0	338	100.0	1,119	100.0	-
不詳	89	-	38	-	51	-	-
計	1,546	-	376	-	1,170	-	-
<39/40<	3.8	-	1.4	-	5.6	-	-
<19/60<	7.6	-	3.3	-	11.1	-	-
平均年令	26.7	-	34.5	-	26.0	-	-

第4図 発病年令別入所在宅別表

発病年令をみると、平均発病年令では在宅患者の平均34.5年に対し、収容患者では26年と両者の間にほぼ10年の差が認められる。

<39/40<, <19/60< をみても在宅患者では、それぞれ1.4, 3.3と収容患者の6.5, 11.1に比し、発病年令が高年令層の方へ偏していることがうかがわれる。

即ち、収容患者では15～19才に21.4%と最高の割合で発病者をみるのに対し、在宅患者では、その最高年令分布は25～29才の13.6%であり、10～29才の発病は収容患者では67.4%に及んでいるのに対し、在宅患者ではわずか36.0%にすぎず、30才台発病患者が22.2%に及んでいる。

このことは発病時の年令が大きければ大きいほど、在宅患者として、居住地に残る傾向が大であることが考えられ、このことは発病年令別患者収容率をみても40才以上ではそのほぼ半数が在宅患者として経過している。

5) 病型(第9表および第5図)

総患者1,546名中、病型不詳の79名を除く、病型は、L型875名で59.6%を占め、M型250名の、17.0%, N型342名23.4%である。病型比¹⁾は1.47である。

a) 性別病型

L型では男61.9%に対し、女では53.7%と男に比し、やや低率を示しているが、N型では男23.6%, 女22.5%と両者の間に有意の差を認めないが、M型では男の14.5%に比し、女では23.8%と女の比率は男に比し、かなり高率でL型と逆の分布を示している。

病型比は男1.62に対し、女1.16と女の方に著明な老化傾向をみる。

b) 発病時期と病型

明治時代に発病した患者の病型はL型48.9%, M型

第9表 発病時期別病型別患者数

区 分 年 次	計	小 計	L	M	N	不 詳	L/M+N
明治 39~43	94	94 (100.0)	46 (48.9)	10 (10.6)	38 (40.5)	0	0.96
明 44~大 4	68	65 (100.0)	35 (53.9)	7 (10.8)	23 (35.3)	3	1.17
大正 5~9	112	109 (100.0)	70 (64.3)	16 (14.6)	23 (21.1)	3	1.79
大正 10~14	128	126 (100.0)	92 (73.0)	11 (8.8)	23 (18.2)	2	2.71
昭和 1~5	149	149 (100.0)	101 (67.7)	17 (11.4)	31 (20.9)	0	2.10
昭和 6~10	222	217 (100.0)	156 (71.8)	24 (11.1)	37 (17.1)	5	2.56
昭和 11~15	246	236 (100.0)	123 (52.1)	57 (24.1)	56 (23.8)	10	1.09
昭和 16~20	218	208 (100.0)	118 (56.7)	35 (16.8)	55 (26.5)	10	1.31
昭和 21~25	142	133 (100.0)	69 (51.8)	30 (22.5)	34 (25.7)	9	1.08
昭和 26~30	97	87 (100.0)	40 (45.9)	30 (34.4)	17 (19.7)	10	0.85
昭和 31~32	21	21 (100.0)	11 (52.3)	8 (38.1)	2 (9.6)	0	1.10
小 計	1,497	1,445 (100.0)	861 (59.5)	245 (16.8)	339 (23.7)	52	1.47
年 不 詳	49	22 (100.0)	14 (63.6)	5 (22.7)	3 (13.7)	27	1.75
計	1,546	1,467 (100.0)	875 (59.6)	250 (17.0)	342 (23.4)	79	1.47
男	1,116	1,063 (100.0)	658 (61.9)	154 (14.5)	251 (23.6)	53	1.62
女	430	404 (100.0)	217 (53.0)	96 (23.8)	91 (22.5)	26	1.16
性 比		59.53	322.58	160.42	275.82	203.85	

第5図 発病時期別病型の変遷

10.6%, N型40.5%で、他の年次に比し、N型の占める割合が著明である。

L型の経過を発病時期別にみると、明治末期より大正時代にかけて漸増し、大正末期には73.0%のL型発病をみたが、この傾向は昭和時代に入っても引続きみられるが、昭和11年以降は患者数の増加にもかかわらず漸次L型分布は減少の傾向を示しており、最近では45.9%となっている。

N型もL型と同じく、明治時代には40.5%と著明であったが、その後は年々減少をみせ、おおむね20%前後にて経過している。

M型は明治時代の10.6%より若干の増減をみせつつ経過し、昭和11~15年には24.1%と次第に増加の様相をみせて経過し、最近では38.1%となっている。

従つて病型比は、明治時代よりL型の増加とともに増加し、大正10~14年には2.71と最大を示し、以後昭和10

年に至るまでこの傾向を持続しているが、その後はL型患者の減少、M型患者の増加とあいまつて、減少の傾向を示し、最近では0.85を示している。即ち、患者の減少とともに、L型の減少、M型・N型の増加傾向をみせている。

6) 性別 (第10表および第6図)

1,546名の全患者の性別は、男1,116名、女430名で、それぞれ72.1%、27.9%を占め、その比は、女100に対し、男259.5である。

a) 発病時期別性別

発病時期別に男女の割合をみてみると、明治末期には男71.3%、女28.7%を示したが、その後は時代の経過とともに男の割合の著明な増加をみたが、昭和時代には再び70%台となり、年々若干の減少を示しつつ経過したが戦後は男の占める割合は60%台となり、最近では男61.9%、女38.1%となっている。

従つて性比の時期別変遷では、明治末期の248.1より次第に増加し、大正5~9年には460.0と最も大きかったが、その後は次第に男女間の差が少なくなつて、特に戦後は167.9~162.2と性比の縮小をみている。この性比の減少は、女性発病者の増加や、男性発病者のみの著明な減少のみによるものでないことは、前述せる罹患率についても明白であり、性比の減少傾向は著明であるといえよう。

b) 病型別性別

病型別に性別をみると、L型では、総L型患者の75.2

第10表 発病時期別男女別患者数ならびに性比

年 区 分		計		男		女		性 比
		実 数	%	実 数	%	実 数	%	
		1,546	100.0	1,116	72.1	430	27.9	
明治39～43		94	100.0	67	71.3	27	28.7	248.1
明44～大4		68	100.0	51	75.0	17	25.0	300.0
大正5～9		112	100.0	92	82.2	20	17.9	460.0
大正10～14		128	100.0	101	78.9	27	21.1	374.1
昭和1～5		149	100.0	115	77.2	34	22.8	338.2
昭和6～10		222	100.0	161	72.5	61	27.5	263.9
昭和11～15		246	100.0	177	72.0	69	28.1	256.5
昭和16～20		218	100.0	154	70.6	64	29.4	240.6
昭和21～25		142	100.0	89	62.7	53	37.3	167.9
昭和26～30		97	100.0	60	61.9	37	38.1	162.2
昭和31～32		21	100.0	14	66.7	7	33.3	200.0
不 詳		49	100.0	35	71.4	14	28.6	250.0
病 型	L	875	100.0	658	75.2	217	24.8	322.6
	M	250	100.0	154	61.6	96	38.4	160.4
	N	342	100.0	251	73.4	91	26.6	275.8
	不 詳	79	100.0	53	67.1	26	32.9	203.9
計		1,546	100.0	1,116	72.1	430	27.9	259.5
L/M+N		1.48		1.62		1.16		

第6図 発病時期別性比

%を男が占め、女は24.8%のみで、その性比は322.6である。M型では、男は61.6%と全病型中、男の占める割合は最も少ない。即ち、その性比は160.4であるが、このことは女子では男子に比し、L型が少なく、M型の占める割合が比較的多いことを意味している。

病型比を性別にみると男1.62に対し、女では1.16と極めて小さい。

N型では男の73.4%に対し、女では26.6%で、その性比は275.8と、ほぼL型・M型の中間の値を示している。

c) 発病時期別病型別性比 (第11表)

発病時期別に病型別に性比の変遷をみると、L型では明治末期の228.57より、時代の経過とともに性比は増大

第11表 発病時期別病型別性比

年 区 分	L	M	N	計
明治39～43	228.6	233.3	2,800	248.1
明44～大4	483.3	133.3	360.0	300.0
大正5～9	400.0	220.0	1,050.0	460.0
大正10～14	557.1	57.1	283.3	374.1
昭和1～5	339.1	240.0	287.5	338.2
昭和6～10	280.5	200.0	311.1	263.9
昭和11～15	284.4	235.3	229.4	256.5
昭和16～20	268.8	150.0	223.5	240.6
昭和21～25	165.4	114.3	240.0	167.9
昭和26～30	344.4	100.0	183.3	162.2
昭和31～32	266.7	100.0	-	200.0
不 詳	366.7	400.0	200.0	250.0
計	322.6	160.4	275.8	259.5

し、大正末期には557.14と最大を示したが、その後は次第に減少し、戦争ならびにそれに附随する生活環境の変化にも著明な影響をみせず減少をみせた。戦後昭和26～30年には344.44と急激に性比の増大をみたが、最近では再び266.66とやや減少の傾向がうかがわれる。

M型では、明治末期233.33より、その後は時代の経過とともに増減をみせつつ経過したが、昭和11年頃より漸次減少し、最近では100.0を示している。

N型の経過は、明治末期280.00より、その後は次第に増加をみせ、昭和6～10年には311.11となつた。更にその後はほぼ230前後にて経過し、昭和26～30年には183.3と減少をみせている。

即ち、L型では昭和に入つて以来、順調な性比の減少をみせてきたにもかかわらず、最近では再びやや増加の様相をみせているが、M型、N型では減少が著明である。

7) 推定発病季節 (第12表)

第12表 推定発病季節男女別病型別

区 分	春 3～5月	夏 6～8月	秋 9～11月	冬 12～2月	計
計	259(35.5)	154(21.2)	130(17.9)	185(25.4)	728(100.0)
男	196(37.2)	107(20.3)	90(17.1)	134(25.4)	527(100.0)
女	63(31.3)	47(23.4)	40(19.9)	51(25.4)	201(100.0)
L	156(36.6)	93(21.8)	70(16.4)	107(25.1)	426(100.0)
M	53(34.0)	30(19.2)	33(21.2)	40(25.6)	156(100.0)
N	50(34.2)	31(21.2)	27(18.5)	38(26.0)	146(100.0)
L M+N	1.5	1.5	1.2	1.4	1.4

発病月の推定される患者 728 名について推定発病季節をみると、春に発病をみたものは全体の35.3%で最も多く、次いで冬期の25.4%であつた。

病型別にみると、L型では若干この傾向がみられるが他の病型では季節的变化はうかがえず、病型比をみても季節による差異は殆んどみられない。

8) 家族集積性 (第13表)

患者 1,546 名について、その世帯数は 1,351 世帯であるが、世帯内患者をみてみると総計 1,820 名に及んでいる。即ち、469 名の患者は本調査にもかかわらず、いんぺいせられていたもので、掌握患者 1,546 名の 30.4%にあたっていることは、らい予防上重要な意義を有する。

第13表 地区別家族集積性

地区別		名古屋	尾張	西三河	東三河	地区不詳	計
一世帯からの発生患者数別	1名	320 (85.6)	422 (75.2)	205 (73.5)	89 (70.6)	9 (81.8)	1,045 (77.4)
	2名	35 (9.4)	84 (15.0)	54 (19.3)	26 (20.6)	1 (9.1)	200 (14.8)
	3名	11 (2.9)	35 (6.2)	12 (4.3)	6 (4.8)	-	64 (4.7)
	4名	5 (1.3)	14 (2.5)	6 (2.1)	4 (3.2)	1 (9.1)	30 (2.2)
	5名	3 (0.8)	5 (1.0)	2 (0.7)	-	-	10 (0.7)
	6名	-	-	-	1 (0.8)	-	1 (0.1)
	7名	-	1 (0.2)	-	-	-	1 (0.1)
	計	374(100.0)	561(100.0)	279(100.0)	126(100.0)	11(100.0)	1,351(100.0)
総患者数		458	783	383	181	15	1,820
家族集積患者数		138	361	178	92	6	775
1世帯当り患者数		1.22	1.40	1.37	1.44	1.36	1.35
家族集積率		30.1	46.1	46.5	50.8	40.0	42.6

第14表 発病から収容までの期間

区分	明治39 ~43	明治44 ~48	大正5 ~9	大正10 ~14	昭和1 ~5	昭和6 ~10	昭和11 ~15	昭和16 ~20	昭和21 ~25	昭和26 ~30	昭和31 ~35	不詳	計
	実数 %	実数 %	実数 %	実数 %	実数 %	実数 %	実数 %	実数 %	実数 %	実数 %	実数 %	実数 %	実数 %
3カ月未満	2 3.1	-	-	1 0.9	-	7 3.8	20 12.9	13 9.0	24 22.8	35 47.9	11 91.7	4 100.0	117 10.5
3~6カ月	-	-	-	-	1 0.8	4 2.2	7 4.5	6 4.2	8 7.6	8 11.0	-	-	34 3.0
6カ月~1年	1 1.5	-	2 2.3	1 0.9	3 2.3	14 7.5	18 11.6	19 13.1	15 14.3	10 13.7	-	-	83 7.4
1~2	1 1.5	1 2.5	6 7.0	5 4.4	7 5.3	19 10.2	26 16.9	16 11.1	24 22.8	16 21.9	1 8.3	-	122 10.9
2~3	1 1.5	-	2 2.3	6 5.3	12 9.1	20 10.8	21 13.5	15 10.4	12 11.4	3 4.1	-	-	92 8.2
3~4	2 3.1	1 2.5	3 3.5	8 7.0	14 10.6	21 11.3	9 5.8	4 2.8	9 8.6	-	-	-	71 6.4
4~5	2 3.1	1 2.5	5 5.8	12 10.5	14 10.1	17 9.1	7 4.5	18 12.5	7 6.7	-	-	-	83 7.4
5~6	-	2 5.0	6 7.0	10 8.8	6 4.5	10 5.4	8 5.2	14 9.7	2 1.9	1 1.4	-	-	59 5.3
6~7	3 4.6	2 5.0	4 4.6	9 7.9	11 8.3	14 7.5	6 3.9	11 7.6	2 1.6	-	-	-	62 5.6
7~8	1 1.5	4 10.0	5 5.8	8 7.0	12 9.1	11 5.9	4 2.6	8 5.6	-	-	-	-	53 4.7
8~9	2 3.1	2 5.0	2 2.3	8 7.0	2 1.5	6 3.2	8 5.2	7 4.9	1 1.0	-	-	-	38 3.4
9~10	3 4.6	-	-	5 4.4	8 6.1	5 2.7	5 3.2	6 4.2	-	-	-	-	32 2.9
10~15	7 10.8	9 22.5	22 25.7	25 21.9	23 17.5	23 12.4	14 9.0	6 4.2	1 1.0	-	-	-	130 11.7
15~20	4 6.2	7 17.5	10 11.6	9 7.9	11 8.3	14 7.5	1 0.6	1 0.7	-	-	-	-	57 5.1
20~25	8 12.3	6 15.0	10 11.6	4 3.5	6 4.5	1 0.5	1 0.6	-	-	-	-	-	36 3.2
25~30	10 15.4	2 5.0	6 7.0	3 2.6	2 1.5	-	-	-	-	-	-	-	23 2.1
30~35	9 13.8	2 5.0	3 3.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	14 1.3
35~40	2 3.1	1 2.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3 0.3
40~	7 10.8	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	7 0.6
小計	65 100.0	40 100.0	86 100.0	114 200.0	132 100.0	186 100.0	155 100.0	144 100.0	105 100.0	73 100.0	12 100.0	4 100.0	1,116 100.0
不詳	10	1	-	-	-	2	-	-	-	-	-	41	54
計	75 6.4	41 3.5	86 7.4	114 9.7	132 11.3	188 16.2	155 13.2	144 12.3	105 9.0	73 6.2	12 1.0	45 3.8	1,170 100.0
平均年数	20.7	14.9	12.5	8.9	8.3	5.9	3.9	4.1	1.8	0.8	0.3	-	6.8
入所率	79.7	60.2	76.7	89.0	88.5	84.6	60.5	66.0	73.9	75.2	57.1	91.8	75.6

第15表 発病年令別発病から収容までの期間

年令階級 期間	0～4		5～9		10～14		15～19		20～24		25～29		30～34		35～39		40～45		45～49	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
3カ月未満	-	-	4	6.1	14	7.7	10	4.2	11	5.7	10	7.6	16	21.2	8	13.2	9	24.4	6	15.7
3～6カ月	-	-	3	4.6	5	2.8	6	2.5	4	2.1	3	2.3	2	2.7	1	1.6	3	8.1	3	7.9
6カ月～1年	-	-	5	7.6	9	5.0	10	4.2	22	11.4	14	10.5	6	8.0	2	3.3	3	8.1	3	7.9
1～2	-	-	8	12.1	14	7.7	32	13.3	16	8.3	18	13.6	7	9.3	5	8.2	3	8.1	2	5.3
2～3	-	-	2	3.0	20	11.0	17	7.1	15	7.8	6	4.6	8	10.7	6	9.8	1	2.7	5	13.2
3～4	-	-	3	4.5	13	7.1	21	8.8	17	8.8	4	3.0	4	5.3	5	8.2	-	-	2	5.3
4～5	-	-	3	4.6	12	6.6	21	8.8	17	8.8	7	5.3	2	2.7	7	11.5	3	8.1	4	10.5
5～6	-	-	5	7.6	10	5.5	13	5.4	11	5.7	6	4.6	3	4.0	3	4.9	3	8.1	2	5.3
6～7	-	-	6	9.1	15	8.2	10	4.2	12	6.2	9	6.8	3	4.0	3	4.9	1	2.7	1	2.6
7～8	-	-	-	-	9	5.0	19	7.9	7	3.6	7	5.3	3	4.0	2	3.3	-	-	3	7.9
8～9	-	-	2	3.0	11	6.0	9	3.8	4	2.1	4	3.0	4	5.3	3	4.9	-	-	-	-
9～10	-	-	2	3.0	4	2.2	10	4.2	6	3.1	4	3.0	2	2.7	2	3.3	1	2.7	1	2.6
10～15	-	-	9	13.6	25	13.7	29	12.1	24	12.4	16	12.1	5	6.7	11	18.1	5	13.5	4	10.5
15～20	-	-	3	4.6	7	3.9	14	5.8	13	6.7	8	6.1	5	6.7	1	1.6	2	5.4	2	5.3
20～25	1	100.0	5	7.6	2	1.1	11	4.6	5	2.6	4	3.0	3	4.0	1	1.6	3	8.1	-	-
25～30	-	-	4	6.1	5	2.8	2	0.8	3	1.6	6	4.6	2	2.7	1	1.6	-	-	-	-
30～35	-	-	1	1.5	3	1.7	2	0.8	4	2.1	4	3.0	-	-	-	-	-	-	-	-
35～40	-	-	1	1.5	-	-	1	0.4	-	-	1	0.8	-	-	-	-	-	-	-	-
40～	-	-	-	-	3	1.7	1	0.4	2	1.0	1	0.8	-	-	-	-	-	-	-	-
小計	1	100.0	66	100.0	181	100.0	238	100.0	193	100.0	132	100.0	75	100.0	61	100.0	37	100.0	38	100.0
不詳	-	-	-	-	1	-	2	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	1	-
計	1	-	66	-	182	-	240	-	193	-	133	-	76	-	61	-	37	-	39	-
平均年数	22.0	-	9.0	-	7.5	-	7.3	-	7.3	-	8.4	-	5.8	-	6.0	-	4.4	-	4.6	-
入所率	100.0	-	90.3	-	93.3	-	93.4	-	82.5	-	74.3	-	66.1	-	62.9	-	56.1	-	55.7	-

年令階級 期間	50～54		55～59		60～64		65～69		70～74		75～79		80～		不詳		計	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
3カ月未満	8	22.9	9	41.0	4	23.5	4	50.0	2	40.0	1	33.3	1	100.0	-	-	117	10.5
3～6カ月	2	5.7	1	4.5	1	5.9	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	34	3.0
6カ月～1年	3	8.6	3	13.6	2	11.8	-	-	-	-	1	33.3	-	-	-	-	83	7.4
1～2	5	14.3	4	18.2	3	17.7	2	25.0	2	40.0	-	-	-	-	1	33.3	122	10.9
2～3	5	14.3	3	13.5	3	17.7	-	-	-	-	-	-	-	-	1	33.3	92	8.2
3～4	1	2.9	-	-	1	5.9	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	71	6.4
4～5	3	8.6	-	-	2	11.8	1	12.5	1	20.0	-	-	-	-	-	-	83	7.4
5～6	2	5.7	1	4.6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	59	5.3
6～7	1	2.9	-	-	1	5.9	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	62	5.6
7～8	1	2.9	-	-	-	-	1	12.5	-	-	1	33.3	-	-	-	-	53	4.7
8～9	-	-	1	4.6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	38	3.4
9～10	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	32	2.9
10～15	1	2.9	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	33.3	130	11.7	
15～20	2	5.7	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	57	5.1
20～25	1	2.9	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	36	3.2
25～30	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	23	2.1
30～35	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	14	1.3
35～40	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	0.3
40～	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	7	0.6
小計	35	100.0	22	100.0	17	100.0	8	100.0	5	100.0	3	100.0	1	100.0	3	100.0	1,116	100.0
不詳	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	48	-	-	54	-
計	35	-	22	-	17	-	8	-	5	-	3	-	1	-	51	-	1,170	-
平均年数	3.3	-	1.4	-	2.0	-	2.0	-	1.7	-	2.5	-	0.1	-	-	-	6.8	-
入所率	61.4	-	52.4	-	48.6	-	53.3	-	45.5	-	50.0	-	25.0	-	-	-	75.6	-

一世帯当り患者数は1.35名であるが、一世帯一名の患者発生世帯が最も多く77.4%を占めている。

一世帯2名以上の患者を有するのは306世帯、775名の患者を保有し、家族集積率は42.9%に及んでいる。

家族集積性を地域別にみると、東三河地方に最も高く50.8%に及び、名古屋市では30.1%と最も低い。

9) 療養所への収容状況

患者総数1,546名中、50年間に療養所へ収容された患者は総数1,170名で75.6%にのぼっている。

a) 発病時期別発病から収容までの期間（第14表）

収容患者1,170名の平均在宅期間は6.8年であるが、発病時期別にみると、古い時代ほど、在宅期間も長く、近年になるほど短くなっている。即ち、明治末期には平均年数20.7年を要して、全患者の79.7%を収容しているが、発病以来、1カ年以内に療養所へ収容された患者は、わずか4.6%の3名のみで、10カ年以内の収容者も僅々26.6%を占めるにすぎず、30年以上の経過者を27.7%にみることは感染源として重大である。

大正時代に入ると、その初期では平均年数14.9年で収容率60.2%と平均年数の短縮に比し、収容率の低下をみているが、10年以内の収容者は32.5%とやや向上をみせている。その後は次第に平均収容年数の短縮、収容率の向上、10年以内収容率の向上を示し、昭和時代には更にこの傾向を強めている。しかし、昭和11年以降の現象と

して、10年以内収容率は著しい向上をみせているのに反し全収容率はむしろ低下をみせ60%前後で経過している。このことは戦争突入による収容かん奨等行政措置の低下や国民の意欲の変化によるものであろう。

しかし、戦後は再び全収容率も向上をみせ平均年数の著しい短縮とともに1年以内の収容率もほぼ50%に及んでいる。

b) 発病年令別発病から収容までの期間（第15表）

発病年令別に収容状況をみると、収容率では5～9才の90.3%より、年令の進むにつれて、おおむね低下をみせているが、とくに60才以上の高令層では発病者のほぼ1/2の収容率を示すにすぎない。

収容までの平均年数をみると0～4才の22年を筆頭におおむね年令の進むとともに減少し、15～19才では7.3年、35～39才では6.0年、60才以上では殆んど2カ年以内を示している。即ち、若年の発病者は、いずれはその殆んどが入所するが、入所するまでの在宅期間が長期にわたる傾向を有し、反対に高年令発病者では、入所する意志のあるものは比較的短期間の中に入所をみるが、収容率は若年層ほど高くはなく、たかだか50%程度であることを示している。

c) 年次別収容年令（第16表および第7図）

療養所へ収容した患者の、発病時期別の収容年令をみると、明治末期に発病した患者の平均収容時年令は40.

第16表 発病時期別にみた患者入所時年令

区 分	明治39～43		明44～大4		大正5～9		大正10～14		昭和1～5		昭和6～10		昭和11～15		昭和16～20		昭和21～25		昭和26～30		昭和31～32		計	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
0～4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
5～9	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	0.54	2	1.27	2	1.44	5	4.59	3	4.23	—	—	13	1.17
10～14	1	1.41	1	2.50	2	2.30	4	3.64	5	4.03	10	5.41	17	10.76	10	7.19	10	9.17	6	8.45	2	10.53	68	6.11
15～19	2	2.82	1	2.50	8	9.20	22	20.00	16	12.90	27	14.59	27	17.09	20	14.39	16	14.68	4	5.63	1	5.26	144	12.94
20～24	8	11.27	5	12.50	12	13.79	21	19.09	24	19.35	31	16.76	27	17.09	24	17.27	15	13.76	3	4.23	2	10.53	172	15.45
25～29	9	12.68	9	22.50	16	18.39	16	14.55	18	14.52	57	30.81	27	17.09	22	15.83	15	13.76	7	9.86	1	5.26	197	17.70
30～34	8	11.27	4	10.00	11	12.64	14	12.73	22	17.74	16	8.65	19	12.02	14	10.07	10	9.17	10	14.08	—	—	128	11.50
35～39	11	15.49	4	10.00	10	11.49	11	10.00	10	8.06	10	5.41	12	7.59	10	7.19	7	6.42	7	9.86	1	5.26	93	8.36
40～44	6	8.45	7	17.50	9	10.34	11	10.00	11	8.87	14	7.57	7	4.43	8	5.76	2	1.83	8	11.27	1	5.26	84	7.55
45～49	2	2.82	6	15.00	5	5.75	3	2.73	5	4.03	6	3.24	7	4.43	7	5.04	7	6.42	5	7.04	2	10.53	55	4.94
50～54	5	7.04	2	5.00	6	6.90	5	4.55	6	4.84	6	3.24	4	2.53	8	5.76	6	5.50	4	5.63	2	10.53	54	4.85
55～59	10	14.08	—	—	4	4.60	2	1.82	2	1.61	4	2.16	6	3.80	5	3.60	6	5.50	6	8.45	3	15.79	48	4.31
60～64	7	9.86	1	2.50	2	2.30	—	—	1	0.81	3	1.62	2	1.27	3	2.16	6	5.50	2	2.82	1	5.26	28	2.52
60～69	2	2.82	—	—	1	1.15	—	—	3	2.42	—	—	—	—	2	1.44	2	1.83	3	4.23	3	15.79	16	1.44
70～74	—	—	—	—	1	1.15	1	0.91	—	—	—	—	—	—	3	2.16	1	0.92	1	1.41	—	—	7	0.63
75～79	—	—	—	—	—	—	—	—	1	0.81	—	—	1	0.63	—	—	1	0.92	1	1.41	—	—	4	0.36
80～	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	0.72	—	—	1	1.41	—	—	2	0.18
小 計	71	100.0	40	100.0	87	100.0	110	100.0	124	100.0	185	100.0	158	100.0	139	100.0	109	100.0	71	100.0	19	100.0	1113	100.0
年令不詳	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
計	71	—	40	—	87	—	110	—	124	—	185	—	158	—	139	—	109	—	71	—	19	—	1113	—
平均年令	40.45	—	35.00	—	34.41	—	29.27	—	31.31	—	28.57	—	28.01	—	31.64	—	31.77	—	37.63	—	43.31	—	31.84	—

第7図 発病時期別入所患者平均収容年令並
平均在宅期間

才で、35～39才における収容率が最もよく15.5%となっているが、その後、時代の経過とともに平均収容時年令は次第に若年化し、同時に29才未満の収容率の向上をみている。大正末期の平均収容時年令は29.3才、29才未満の収容状況は57.3%である。昭和時代に入ると、その初期では再び平均収容時年令31.3才とやや老化をみせたが、その後は再びやや若年化をみせ、おおむね28才台で経過するが、29才未満の収容率は、60%台を示し、向上をみせている。

戦中の昭和16～20年では平均収容年令は31.64才とやや増加をみせているが、29才以下の患者の収容状況は56.1%と若干の低下をみせている。戦後の昭和21～25年もおおむね戦中と同じ傾向であるが、最近の5カ年間は平均収容年令37.6才と老化し、29才未満の収容率も32.4%となり、平均収容年令の老化とともに、収容率の低下をみせている。

総括並びに考察

1) 患者数について

日本のらい患者については、厚生省の行つた数次にわたる全国らい患者の一斉調査¹²⁾¹³⁾があり、これらの資料ならびに昭和8年に長島愛生園より出版された日本のらいの分布¹⁾により患者数の変遷をみると第17表にみるとく、全国では明治30年に19,987人の患者があり、明治39年のそれは23,815人、人口1万対5.0と記載されている。その後は全国では漸次減少し、大正8年には19,261名、万対2.60、大正14年15,351人、万対2.50、昭和5年14,263、万対2.21、昭和8年13,241人となり、その後も、人口万対2.1～2.2の経過で昭和30年には約15,000、万対1.80と推定されている。

この資料による愛知県の患者数は、明治30年1,019人

第17表 全国愛知年次別患者数

年 区 分	厚生省の資料		本 調 査	
	全 国		愛 知	
	患 者 数	人 口 万 対 有 病 率	患 者 数	人 口 万 対 有 病 率
明治 39～43	23,815	5.00	94	0.53
明 44～大 4	—	—	159	0.82
大正 5～9	16,261	2.92	261	1.25
大正 10～14	15,351	2.57	375	1.62
昭和 1～5	14,261	2.21	498	1.94
昭和 6～10	15,193	2.19	656	2.29
昭和 11～15	15,763	2.16	781	2.47
昭和 16～20	—	—	771	2.47
昭和 21～25	15,000	1.80	714	2.11
昭和 26～30	15,000	1.68	678	1.77
昭和 31～32	—	—	672	1.76

より、明治39年 913人、万対5.1より、全国と同様次第に減少し、大正8年1,080人、万対5.00、大正14年713人、3.00、昭和5年590人、2.30、昭和8年329人、1.30となつている。

本調査により、つかみえた患者は、明治時代にはわずかに94名のみで人口万対0.5と著しく低率であつたが、その後は次第に増加し、昭和1年には0.16、昭和5年498人、1.94、昭和10年656人、万対2.29となり、昭和5～10年を境として、それ以前は厚生省の数字の方が本調査の数字を上廻り、それ以後は本調査の数字の方が、厚生省数字を上廻っている。その後、本調査では昭和15年781名、2.47と最も多くの患者を保有し、この傾向はその後戦中、戦後の10年間にわたつて続いているが、昭和30年末には678名、万対1.77を示し、全国の万対比とほぼ同様の数字がみられた。

このことは、明治・大正時代の患者数は、その大部分が、今日では資料不備のため調査不能となつていないことを意味するもので、患者そのものが少なかったわけではない。しかし当時は収容患者に比し、在宅患者が多数を占めたため、警察官による聞きこみ調査が多いので、その全部が必ずしもらい疾患であつたとも断定しかねるが、いずれにしても、明治時代、大正時代には、本資料の結果にもかかわらず、人口万対3～5程度の患者が存在していたことは疑う余地はない。

しかし、らい患者の通性として、変名偽名等容易に用い、同一人で重複届出登録をみた患者が、本調査全数の10%に及んでいるので、過去において警察官等による調査報告や一般開業医師の診定のままに患者として登録せられていた厚生省の数字には、当然重複再録等も含まれ

ていると考えることは容易である。

ともかくも、らいは、その経過が非常に長期にわたるため、いつたん収容した患者でも逃走、転園、一時帰省等の手段により、郷里へ帰り、或いは行方不明となつてゐるものが9%の多きにみられるため、適確な患者数を掌握することは非常に困難である。

これらのことは、療養所の退所患者、逃走患者、一時帰省患者等の消息調査を徹底的に行うことにより、更に明確にされるものであるが、このために昭和10年以降の患者数が本調査では、厚生省の数字を上廻ることになっている。

2) 新発生患者について

患者の発病率については、戦前には光田、林¹³⁾による壮丁らいに関する報告がある程度であり、これによると明治時代には壮丁1,000に対して1.57~0.97程度であつたものが、昭和10年には0.47となつたと報告されている。また戦後、塩沼、北野¹⁵⁾による鹿児島県の昭和10年より22年に至る間の調査成績では、発生率を人口10万対4.6と報告している。

昭和22年4月届出伝染病規則の制定以来、毎年の届出数が衛生年報に記載されるようになったが、らいという特殊な疾病は、医師による診断決定までに相当の年月を経過するものとみられ、宮崎¹⁶⁾によるらいの進展過程の研究によつても明らかな如く、潜伏期、第一次症状期、移行期、確徴期と経過するもので、患者の大半は第一次症状期の後半より確徴期に至る間に受診するものと考えられるので、当然、発病の時期と届出の時期の間かなりの期間が存在することが考えられる。宮崎のいう第一次症状期の発現時期を発病時期として考え、本県の新発生率をみると、戦前、昭和時代には人口10万対0.9~2.3と前述せる鹿児島県のそれに比し、著しく低率であり、

第18表 最近における全国愛知届出患者数

区 分 年 次	届出数 (人口10万対比)		本 調 査 (愛知)	
	全 国	愛 知	新患者数	人口10万対比
昭和 23年 (1948)	712 (0.9)	14 (0.4)	33	1.0
〃 24 (1949)	778 (1.0)	26 (0.8)	29	0.9
〃 25 (1950)	604 (0.7)	33 (0.9)	33	0.9
〃 26 (1951)	487 (0.6)	17 (0.5)	20	0.6
〃 27 (1952)	326 (0.4)	15 (0.4)	17	0.5
〃 28 (1953)	315 (0.4)	30 (0.8)	17	0.5
〃 29 (1954)	333 (0.4)	28 (0.8)	18	0.5
〃 30 (1955)	331 (0.4)	32 (0.8)	25	0.7
〃 31 (1956)	-	-	13	0.3
〃 32 (1957)	-	-	8	0.2

戦後も0.5~1.0となつている。全国のそれを新発見患者数よりみると、人口10万対、昭和25年1.2、昭和27年0.5、昭和30年0.5となつているが、本調査においても、昭和25年0.9、昭和27年0.5、昭和30年0.7と全国とほぼ同じ傾向がみられる。

新発生状況は、患者数、10万対率ともに、いずれも最も多くの患者をみた昭和11~15年に至る5カ年間に比し、戦後直ちにすでに $\frac{1}{2}$ 強に減少し、昭和30年末には $\frac{1}{3}$ 強となり、更にこれが、昭和32年には $\frac{1}{12}$ 強と著明な減少をみせている。このことは、大西¹⁶⁾の述べる大阪皮膚病研究所外来患者の統計的観察による外来患者の昭和11~13年の数字に比し、戦後は $\frac{1}{2.5}$ に減少した事実と同様な傾向をみせ、新患者の減少をみている。

3) 在宅患者について (第19表)

第19表 全国・愛知年次別在宅患者数

年 区 分	厚 生 省 の 資 料				本 調 査	
	全 国		愛 知		愛 知	
	在宅患者数	人口10万対有病率	在宅患者数	人口10万対有病率	在宅患者数	人口10万対有病率
明治39~43	23,605	5.00	913	5.10	77	0.40
明治44~大4	-	-	-	-	136	0.68
大正5~9	14,706	2.65	1,080	5.00	230	1.10
大正10~14	13,126	2.22	713	3.00	321	1.38
昭和1~5	10,991	1.72	590	2.30	381	1.48
昭和6~10	8,789	1.27	329	1.30	416	1.45
昭和11~15	5,817	0.81	356	1.12	448	1.41
昭和16~20	-	-	-	-	447	1.56
昭和21~25	2,526	0.30	250	1.08	306	0.90
昭和26~30	1,113	0.12	65	0.25	169	0.45
昭和31~32	1,104	0.12	44	0.15	156	0.41

在宅患者の帰すうは、感染源として甚だ重要な意味をもつていることはいふまでもないが、在宅患者の増減は、やはり新発生患者数に影響するところ大であり、最も多くの在宅患者を保有したのは、昭和11~15年の5カ年間で、448名を数え、人口10万対1.41を示している。在宅患者数は、その後は年経過とともに減少し、昭和21~25年の戦争直後では306名、万対0.90より、昭和31~32年には156名、0.41を示している。これらの数字を全国ならびに厚生省にて発表されている本県の在宅患者状況と比べてみると、いずれも相当大巾に本調査成績では高い在宅率となつている。このことは、前述せる一時帰省のまま帰園しない患者や、逃走脱走等の患者で消息の判明したものの中、在宅しているものを在宅患者数に加えたためであるが、いずれにしても、行政庁にて把握され

ている在宅登録患者のほぼ2倍の患者が存在していることを意味しており、らい予防上重大な問題と考えられ、患者管理、とくに収容患者の措置の適正が要望せられる。

4) 所謂戦争らいについて

宮崎¹⁸⁾、高島¹⁹⁾は、今次の太平洋戦争とらい発生との関係を論じ、殊に宮崎は、潜伏またはそのままの状態では、発病にまでに至らなかつたかも知れない状態の人が戦争という困難な状況下に遂に発病に至つたと断じ、誘因として過労、寒冷、暑熱、アメーバ赤痢、結核、マラリヤ、戦傷等をあげており、また Hasseltine²⁰⁾は米西戦争および第一次大戦、Aycock²¹⁾は第二次大戦の米国出征兵士の発病者について調査した結果を、米西戦争の発病者は、おおむね米国外での感染で、第一、第二次大戦のそれは多くその源を米国内の感染に発し、戦争の悪条件下に発病したものと推定している。

本調査においても、満洲、中南支、比島、ビルマ等において転戦中に発病、或は内地において軍務に服している中に発病せるもの等35例をみているが、この35例中、家系にらい患者を有するもの8例あり、これらは宮崎の論ずる如く、戦争、軍隊という悪条件下に遂に発病に至つたものと推定され、他は外地における新感染発病と考えられるが、発病時期別の患者数からみても明らかな如く、戦中、戦後の悪条件下にもかかわらず、発病率は既に昭和6～10年に至る5か年間に最大罹患率を示しており、昭和20年を中心とした10か年間では、むしろ前半の5か年間で若干の、後半の5か年間でかなりの新発病率の低下をみていることは、前述の例にもかかわらず、本県患者の発病状況には、戦争による影響は殆んどみられなかつたといひ得よう。

5) 病型について

病型別には、L型が864名で59.3%を占めている。病型比では全数1.47で、全国療養所入所患者の1.70、北野²¹⁾による岐阜県の状況では1.56といずれも本県の調査より高くなっている。

病型別の危険度はL型で最も高く、M型は旺盛期または急性増悪期を除き、感染源としての意義は遙かに少なく、N型では實際上、殆んど危険はないといわれており²³⁾、また井上²⁴⁾によるらいの減少傾向による二、三の研究によれば、病型の移動現象、つまり病型比の減少はらいの減少過程を意味すると論じているが、本県における病型比の経過過程は、大正末期より昭和10年に至る約15年間は病型比も2.1～2.7を示し、L型旺盛期ともいふべき状況であつたが、その後は次第に減少し、昭和30年

第20表 年次別病型比 (岐阜・愛知)

年次別	岐 阜			愛 知		
	L	%	L/M+N	L	%	L/M+N
明治39～43	—	—	—	46	5.34	0.96
明44～大4	—	—	—	35	4.06	1.12
大正5～9	—	—	—	70	8.13	1.79
大正10～14	11	6.19	0.73	92	10.69	2.70
昭和1～5	16	8.99	1.60	101	11.74	2.10
昭和6～10	30	16.85	1.67	156	18.12	2.56
昭和11～15	46	25.84	2.09	123	14.29	1.09
昭和16～20	38	21.34	1.81	118	13.71	1.09
昭和21～25	26	14.60	1.73	69	8.01	1.08
昭和26～30	11	6.19	0.85	40	4.64	0.85
昭和31～32	—	—	—	11	1.27	1.00
小 計	178	100.00	1.56	861	100.00	1.47
不 詳				14		1.75
計	178	100.00	1.56	875		1.47

末には0.85と、たまたま隣県岐阜の30年末におけるそれと同じ数字を示している。しかし、滝川²⁵⁾により昭和28～29～30各年の全国届出患者の調査では病型比は0.80と報告されているところからみると、本県の昭和32年の1.00はなお高率であり、患者発病数は少なくとも、楽観は許されない。

昭和21年以降における病型比の減少は特に著明なM型の増加、L型の減少によるものである。

更に病型別に収容状況を見ると、収容患者では発病後10年以内に収容されたものはL型69.9%、M型76.9%、N型52.8%で、L型およびM型に多くみられるのは感染源として喜ばしいが、一方、在宅患者で10年以内のものはL型37.9%、M型16.2%、N型27.5%で、他はいずれも10年以上の経過者であることからみると、なお相当のL型M型患者が長期にわたり在宅していることを意味しており、これらの傾向は、ほぼ北野による岐阜県のすう勢と同様である。

6) 発病年令について

従来より、らい患者の発病年令は5才以上の子供と20才前後に多く、30才以後の発病は比較的少なく、稀に高令者の発病もあるといわれ²³⁾、Hopkin²⁶⁾(米)の700例の調査でも、その大部分は9～30才で発病し、思春期に頂点に達し、橋本および小松²⁷⁾の7,976人についての調査でも15才以下の発病者は1,689人で約21%を占め、11～30才でのそれは5,577人で約70%に達していると報告している。本県における発病年令分布もほぼ同様な傾向をみせ、15～19才に最も高く19.7%を示し、10～29才にお

ける発病は全体の63.1%を示している。

ただ特異なのは、療養所へ入所した患者と在宅患者の発病年令分布の相違であつて、前者では10～29才における発病は67.4%と Hopkin の調査例とほぼ同じ率を示すのに対し、後者ではわずか36.0%にすぎず、前者と後者の間に平均10年の差をみるのは、 $<19/60<$ が前者 15.1 後者 1.4 と著しい相異を示すこと等からも在宅患者は高令の発病者の多いことを意味しており、つまり高令発病者は在宅患者になり易いことがうがわれる。

井上²⁴⁾によるらいの減少傾向ならびに野辺地²⁸⁾による通疫後退現象をみると、本県においても、著明な年令分布曲線の右旋および平均年令の上昇、 $<39/40<$ の減少をみせている。即ち平均年令をみても、すでに昭和中期において平均年令の上昇傾向をみせ、同時に発病年令曲線の右旋化がおこっているが、特に著明な傾向をみせたのは昭和21年以降であつて、最近では明瞭な浸染度後退現象をみせている。

即ち、らいの減少傾向は、発病年令についてみても、戦中戦後の悪条件下にもかかわらず、影響されることなく続いたものであり、この傾向は北野による岐阜県のすう勢と全く同様であつた。

また病型別に $<39/40<$ 、ならびに $<19/60<$ とをみると、特に後者ではL型の20.3に対し、N型9.5、M型2.8と特にM型に高令者発病が著明であるようにみうけられるが、 $<39/40<$ ではL型7.1、N型3.1、M型3.3と特にM型にのみ著明ではない。このことからしてM型は他型に比し、比較的各年令層に平等に発病者をみていることがうかがわれ、これに対し、L型では若年層に頗る多いことがみうけられる。

7) 性比について

本県における全患者の性比は2.6:1である。一般に男性患者が女性患者より多く、全世界を通じ、その比は2—3:1であるといわれている。本邦では、昭和15年の調査では、2.2:1、昭和30年には1.8:1を示している。

Lowe²⁹⁾によると小児では成人ほど両性間に罹患率の差がなく、15才以上の所謂、思春期には女性の罹患率が高いといっているが、本調査ではそうした傾向はみられず、各発病時期を通じ、昭和21～25年の15～19才においてのみ男0.57に対し、女0.96と女性の罹患率高きのみであつて、その他の年はいずれも男性の15～19才または20～25才において、最も高い罹患率をみるのは、或いは地域性の問題であろうか。

また Brockington³⁰⁾は、その著 World Health において、未開時代ほど性比は大きく、文明の進めば進むほど

性比が減少することを述べているが、本調査の発病時期別の性比の変遷をみても、大正5～9年の間に4.8と著しく高く、その後は年々減少し、昭和20年には1.8となつていく。このことはまた、井上のいう減少過程を示す1指標でもあつて、発病年令、病型比とともに減少傾向を明白に示しているものといえよう。

8) 家族集積性について

らいの家族集積性については北野による岐阜県の癩の考察³¹⁾によると、家族集積率は33.4%、家族内2次患者23.3%と述べているが本県においては家族集積率42.6%であつた。疾患が疾患だけに、らいの悲惨さは目にあまるものがあるといえよう。しかも、地域的にみても、人口稀薄な山地地方ではその家族集積率も50.8%に及んでいるが、人口稠密な名古屋市においてすら30.1%にのぼっていることは、患者家族の発病管理が、いかに重要なものか如実に物語っている。

9) 転帰について

北野による岐阜県患者の発病から収容までの期間は平均7.1年で、岐阜県では昭和21年より25年に至る間が最も長く、平均8.6年を数え、最近では3.1年と短縮されているが、本調査では、平均収容年数は7年と岐阜のそれと全く同じであるが、岐阜県にみる如く、戦後に最も長い期間を有せず、明治末期の平均20年より、時代経過とともに徐々に縮少し、戦中、戦後の影響をうけることなく、最近ではわずか数カ月を示しているにすぎない。

第21表 発病時期別平均収容年平均令在宅期間

年 区 分	平均収容年令	平均在宅期間	入 所 率	平均発病年令
明治 39～43	40.45	20.73	79.7	22.06
明 44～大 4	35.00	14.86	60.2	24.61
大正 5～9	34.41	12.49	76.7	23.43
大正 10～14	29.27	8.93	89.0	21.21
昭和 1～5	31.31	8.25	88.5	23.45
昭和 6～10	28.57	5.88	84.6	24.84
昭和 11～15	28.01	3.93	60.5	28.33
昭和 16～20	31.64	4.09	66.0	32.65
昭和 21～25	31.77	1.83	73.9	33.17
昭和 26～30	37.63	0.76	95.2	39.60
昭和 31～32	43.31	0.28	57.1	48.90

一方、収容率についてみると、明治末期の79.7%より、大正時代、昭和初期にかけては80%以上の入所状況を示していたが、昭和11年以降は60%台に低下し、戦後に至り、再び70%代を示しているが、このことは戦後、入所かん奨等の行政措置が強力に行われたためと考えられ

る。しかし平均発病年令の老化とともに、収容率の低下も予想されるが、この傾向はすでに昭和31～32年において57.1%と低下をみせており、感染源対策として、在宅期間の短縮のみでなく、収容率の向上が望まれる。

結 論

明治39年より昭和32年に至るほぼ50年間の愛知県の新発病患者について、疫学的考察を試み、次の所見を得た。

1) 明治39年より昭和32年に至るほぼ50年間の新発病患者は1,546名で、この新患者発病率は人口10万対0.1～1.6で1年平均患者数は26.7人であった。

最も多くの患者発病をみたのは昭和11～15年に至る5カ年間で、1年平均患者発病数は50名を示した。その後は著明な減少をみせ、最近では患者数も10名前後と最多期の $\frac{1}{4}$ 程度と減少をみせている。

人口10万対罹患率についてみても同様で、昭和26～30年にいたる5カ年平均罹患率は0.5、昭和31～32年の2カ年間では0.2と戦前の $\frac{1}{4}$ の減少をみた。

2) 有病率は本調査では明治時代人口万対0.5と低率であるが、昭和10年以降はほぼ全国平均の万対有病率を示し、昭和32年末には1.8となつている。従つて本県における患者の減少傾向は非常に著明であるが、しかし、本県には、昭和32年末の登録在宅患者50名の他に約100名の未登録患者の存在することが明確となり、このことはほぼ登録患者の2倍にあたる所謂いんぺいらい患者の存在を意味している。

3) 発病年令は15～19才に最も著明で16.7%を示し、10～29才における発病は全体の63.1%を示しているが、時代により、環境により若干の相異がみられる。特に収容患者と在宅患者の発病年令には約10カ年のズレが認められ、在宅患者では10～29才における発病率は36.0%にみられるのみである。即ち収容患者は若年発病に多く、在宅患者は高年発病が多い。

発病年令の年次変化をみると発病年令の後退化が著明であり、この傾向は既に昭和中期よりみうけられたが、最近の分布曲線では、青少年峰が消失する傾向にある。

4) 病型、病型別ではL型59.6%、M型17.0%、N型23.4%である。

病型比(L/M+N)は平均1.47であるが、年次別の病型比の変遷では大正末期2.71に比し、昭和26～30年には0.85と病型比の改善が著しい。

病型別に発病年令をみると、M型では $<19/60<$ は2.0とL型の7.8、N型4.6に比し最も小さく、また $<39/40<$

でもM型に2.2を示している。このことは他型に比し、M型発病は各年令層にわたつていることを意味し、とくに戦後は老人階級にM型の発病が目立っている。

5) 性比については、全患者の性比は259.5であるが、時期によつて異なり、大正5～9年には460.0を示したが、その後は年々減少し、昭和26～30年には162.2となつてい

る。病型別にはL型の322.6に対し、M型160.4と最も性比は小さく、N型は275.8となつてい

る。6) 発病季節別には若干春に著明で35.5%を示し、L型にこの傾向がうかがわれる他は特に発病と季節の消長には特異性がない。

7) 家族集積性についてみると、家族集積率42.6%である。

とくに人口稀薄な山地地方には集積率著明で50.8%に及び、名古屋市においても、家族集積率30.1%を示している。

8) 療養所への収容状況をみるに総患者1,546名の中はほぼ50年間に収容された患者は1,170名75.6%であった。

1,170名の収容患者の収容までの期間は、5年以内602名、53.8%である。収容状況は時代によつて大いに異つており、明治時代には平均20.7年を示したが、その後は時代の経過とともに次第に短縮し、昭和26～30年には0.7年を示すに至り、年経過とともに発病即入所の様相を呈している。

発病より収容までの年数は平均6.8年、収容までに10年以上在宅している患者は24.3%に及んでいる。

発病年令と収容状況をみると、若年発病ほど収容率よく、高年層ほど悪くなつてい

る。収容率よく、高年層ほど悪くなつてい

る。収容された患者の中、退所したものは138名で8.92%である。退所後再び在宅したものは121名、残りの17名は所在不明者である。

10) 在宅患者総数は376名で全患者の24.32%を占めている。在宅率の高いのは昭和11～15年の5カ年間で、人口万対1.41を示したが、最近では万対0.41となつてい

る。

擱筆するに当り、懇篤なる御指導御校閲を賜つた岡田教授に感謝を献げ、終始御鞭撻御指導賜つた野辺地教授、古武教授に深謝致しますと共に、多大の御援助、御指導を戴いた愛知県衛生部長小川朝吉博士はじめ、県衛生部諸氏並びに名古屋大学公衆衛生学教室、予防医学教室員の方々に厚く感謝します。

文 献

- 1) 井上 謙：らいの分布（日本1933）長島愛生園出版（昭9）
- 2) 厚生省大臣官房統計調査部：昭和29年衛生年報 厚生省大臣官房統計調査部（昭31）
- 3) 浅野武一：皮膚泌尿器科雑誌，**20**，789（大9）
- 4) 田中謙吉：愛知医学会雑誌，**41**（10）1637（昭9）
- 5) 清水圭三：名古屋医学会雑誌，**49**（1）115（昭14）
- 6) 光田健輔：公衆衛生雑誌，**57**（5）318（昭14）
- 7) らいの病型シンポジウム：レブラ，**24**，225（昭30）
- 8) 高島重孝：レブラ，**24**，41（昭30）
- 9) 愛知県統計課：愛知県統計書，愛知県（明39～昭32）
- 10) 林 文雄：日本公衆保健協会雑誌，**14**（4）（昭13）
- 11) 林 文雄他：レブラ，**10**，259（昭14）
- 12) 厚生省予防局：癩患者に関する統計，厚生省予防局（昭17）
- 13) 藤楓協会：日本のらいについて，藤楓協会（昭30）
- 14) 光田健輔・林 文雄：東京医事新誌 No. 3151：24（昭14）
- 15) 塩沼英之助：レブラ，**12**，33（昭23）
- 16) 宮崎松記：レブラ，**11**，124（昭15）
- 17) 大西基四夫：レブラ，**19**，27（昭25）
- 18) 宮崎松記：レブラ，**17**，1（昭23）
- 19) 高島重孝：レブラ，**17**，8（昭23）
- 20) Hasseltine. H. E. : Internat. J. Lep. **8** 501(1940)
- 21) Aycock W. L. Gordon J. E. : Amer. J. med. Assoc. Sci. **214**: 329 (1947)
- 22) 北野博一：レブラ，**26**，325（昭32）
- 23) 佐藤三郎他：日本皮膚科全書 IX癩；金原出版株式会社（昭29）
- 24) 井上 謙：癩の減少傾向に関する二，三の研究 長島愛生園出版（昭24）
- 25) 滝川勝人：レブラ，**26**，92（昭32）
- 26) Ralph Hopkins, Oswald E. Denney : Leprosy in the United States, J. Am. Med. Assoc. **92** (3) (1929)
- 27) 橋本・小松：レブラ，**6**，649（昭10）
- 28) 野辺地慶三：公衆衛生学第4輯疫学総論，日本臨床社（昭26）
- 29) Lowe. J. : Internat. J. Lep., **2**, 57 (1934)
- 30) Brockington F.: World Health the Whitefriars. Press Ltd, London (1958)
- 31) 北野博一：レブラ **27** (1) 62—72（昭33）